

イスラム教を「知る」

六年 M・S

「大部分の日本人が一つの宗教に固執しない」というのはよく言われる話です。日本で取り入れられている宗教行事を見ると、その様子がよくわかります。お正月には初詣に行き、八月にはお盆で先祖を迎え、十二月にはクリスマスを祝う。これらの一部が宗教行事としてではなく、家族や友人と祝うイベントとして捉えられていることは否めませんが、多くの日本人は神道・仏教・キリスト教の三つの宗教に知らず知らずのうちに触れていることは事実です。その一方、日本ではほとんどなじみのない宗教もあります。その一つとして挙げられるのがイスラム教です。

私がイスラム教に興味を持つきっかけとなったのは四年生の世界史Aの授業でした。イスラム教の成立とイスラム諸国家について教わった時、イスラム教では喜捨という貧しい人々への寄付が推奨されていることを初めて知りました。また、イスラム教国家の中には、イスラム教徒ではない人々に課せられていた人頭税を廃止するなど、異教徒に対して寛容な政策をとった国があったことも学びました。そんな素晴らしい性質を持つ宗教の信者の中から、なぜテロ事件を起こすような人々が出てくるのだろうか。そんな疑問を持ち始めてから、私はイスラム教に関する様々な本を読むようになりました。そして、ほとんどのイスラム教徒は優しく、平和を愛する人々であり、テロリストとは区別しなくてはならないと思うようになりました。

さて、冒頭で日本人は一つの宗教に固執せず、様々な宗教に触れているとお話ししました。そのため、私はつい最近まで、日本は他の宗教に対して寛容であると思っていました。日本人はイスラム教にまだあまりなじみがないけれど、日本にはそれを受け入れる基盤があると考えていたのです。ところが、ある雑誌を読んだとき、この考えが自分の思い込みであることに気付かされました。その雑誌には日本に住んでいるイスラム教徒へのインタビュー記事が掲載されていました。そこには、「アルバイト先のコンビニでスカーフをはずすように言われた」とか「自転車に乗っていたら、警察に止められた」という証言が載っていたのです。日本の状況は寛容と言うには程遠いと思いました。

日本が今すぐにイスラム教に対して寛容な社会になることは難しいでしょう。なぜなら、多くの日本人がイスラム教に関する知識を欠いているからです。十

年前だったら、イスラム教について全く知らなくても済んだかもしれません。しかし、今は違います。日本人二人がI S I Sによって殺害されたあの事件以降、確実にイスラム教は日本にとっても遠い存在ではなくなりました。イスラム教が身近になった今こそ、イスラム教を正しく「知る」ことが大切なのではないのでしょうか。正しい知識がイスラム教に対する誤解をなくし、寛容な社会へとつながるのではないかと思います。

次に、イスラム教について「知る」時に大切なポイントを、私の経験を踏まえてお話ししたいと思います。まずは、様々な角度から知識を得ることです。この重要性を教えてくれたのは、黒井文太郎氏の著書『イスラム国の正体』でした。その本には、『『イスラム教は本来平和的な宗教で、信者のほとんどは優しい人々である』という考察を日本ではよくするが、それだけでは不十分である』とありました。私はまさしく、筆者の言う不十分な考察をしていたので、急所を突かれたと思いました。筆者の主張を聞いて、一瞬ギョッとした人がいるかもしれません。しかし、彼はイスラム教を危険視しているわけではありません。イスラムの多くの社会は昔から共同体意識が強く、別の集団に対して排他的になりがちです。さらに、この排他性が宗教対立に結びつきやすいというのが筆者の見解です。イスラム教には確かに冒頭に挙げた喜捨のように、弱者の救済を重要視する優しい面が多くみられます。ただ、私たちはイスラム社会の背景にある複雑な現実にも目を向ける必要があるのです。この本を読むことで、肯定的な面と否定的な面のどちらにも目を向け、偏りのない知識を得ることの大切さを学びました。

もう一つ、私が声を大にして言いたい、イスラム教を「知る」時に大切なポイントがあります。それは、可能な限りイスラム教に関係する人に会って、直接話を聞くことです。三月の終わり、私は母と東京ジャーミーに行ってきました。東京ジャーミーとは代々木上原にあるイスラム教の礼拝堂です。新宿から小田急線に乗って通学している人は、先の尖った細長い塔が隣接した、大きなドーム状の屋根を持つこの建物を見たことがあるのではないのでしょうか。私がこの東京ジャーミーを訪れた理由は、受験で忙しくなる前に一度行っておきたい、という単純なものでした。土日は日本語ガイド付きで礼拝を見学できるのですが、私たちが行った時は平日で、しかも礼拝堂の外から中をのぞくと、ほとんど誰もいないようだったので、初めは建物だけを見てすぐに帰るつもりでした。ところが、建物に入る時にたまたま信者の女性に会うことができました。

彼女に案内されるまま、私たちは二階にある女性用の礼拝堂に入りました。イスラム教徒は一日五回、決まった時刻に礼拝をします。しかし、マーウィーさんというこの女性はその時間は仕事で忙しいので、自分の都合に合わせて、この礼拝堂に礼拝をしに来るのだそうです。この時、礼拝堂内にいたのは私と母とマーウィーさん、一階にいる男性の信者の四人だけでした。ですから、私はあまり緊張することなく、マーウィーさんの礼拝の様子を見、お話を聞くことができました。

この日一番の収穫は、神と人とのつながりを肌で感じられたことでした。マーウィーさんは涙を流しながらお祈りしていました。彼女がどんな内容を祈っていたのかはわかりません。しかし、その様子を見た時、彼女が心の中で確かに神と対話しているように思えました。お祈りが終わった後、「毎日汚れたものも含め、いろいろなものを見たり聞いたりするけれど、この礼拝堂の中では神様と私だけになることができる」と彼女は話してくれました。それまで、本を読むだけでは感じる事ができなかった神と人とのつながりを、実際にこの目で確かめることができました。

マーウィーさんは、イスラム学の専門家でありながらイスラム教徒ではない友人の話もしてくれました。大多数のイスラム教徒がその全内容を読んだことのない聖典クルアーンを、彼はほぼ完璧に覚えています。イスラム教に入信する気はないそうです。そんな友人に対して、マーウィーさんは「彼がイスラム教を信仰するか否かは彼自身の問題で、私たち周りの人間が干渉することではない」とはっきり言っていました。この発言から、イスラム教は改宗を強制する宗教ではないことがよくわかりました。

今回、信者であるマーウィーさんと出会って、関係者に直接話を聞くことの貴重さ、そして大切さを実感しました。同じ情報でも、ただ活字で読むのと、関係者の口から話されるのを聞くのとでは大きく異なります。顔の見える相手から知識を得ることの役割は非常に大きいのです。

様々な角度から知識を得ること。そして、関係者から直接話を聞くこと。皆さんにはこの二つのポイントを大事にして、イスラム教のことを「知って」ほしいと思っています。この二つのポイントはイスラム教に限ったことではなく、どんな内容を「知る」時にも役立つと思うので、ぜひ実行してみてください。最後に、私は先程「日本の状況はまだ寛容と言うには程遠い」と言いました。しかし、寛容な社会になれる日はいつか来ると信じています。寛容になるため

の第一歩は、先ほどから何度も述べている二つのポイントを大切に「知る」ことです。イスラム圏の人々の中で日本人のことを好意的に捉えている人は意外と多いです。ですから、「知る」という一歩を踏み出すことができれば、イスラム教に対して寛容な社会への道のりはグッと短くなると思います。イスラム側からのアプローチに応えるために、寛容な社会へとステップアップするために、まずは、イスラム教を知ってください。